

28年ぶりの研修指導に思う

1988年、私は当時のJICA筑波国際農業研修センター(TIATC)野菜セクションのフィリピン特設種子生産コースで、2月から10月までコースの実習指導に当たったことがある。それから28年が経った昨年、縁あってAAIの一員として再び指導に当たったが、真っ先に変わったと思ったのは研修員すべてが携帯情報端末をもち、実習中に写真を撮ることであった。また、自国にいる家族とビデオ映像を見ながら連絡を取り合っていることも、かつては考えられないことであった。このことは、ホームシックによる問題からの解放になるのかもしれないが、同時に、老婆心ながら、遠く離れた異国の



接木の様子を
スマホで撮影する研修員

地で、国のために技術を修得して持ち帰ろうとする気概に負の影響を与えてはいないだろうかと思ってしまった。また、もう一つ感じたことは、国際協力において過去にも言われていたことだが、援助されて当然とでもいった考え、リクエストがより強くなったのではないか。それは、個別実験指導に当たった際の材料準備で、日本でもそう安易に入手や設置できないものの要求がいくつかあったことや、研修旅行の要望から感じ取ったことである。



研修旅行での
プロッコリー圃場の見学

研修指導に当たる私のスタンスは、彼らが自ら考え、自ら学んでゆくという気持ちを醸成する立場にあると心得ており、28年前とそう変わりはない。時には一緒に学び、時には叱咤激励する。最終的にはこちらからの技術指導、彼らの技術獲得の過程で信頼関係が構築されればそれに越したことはない。



スイカ挿接ぎ実習



共通実験での
パレイショ種いも植付け

私は鯉淵学園農業栄養専門学校で24年間、学生指

導に当たったが、学園の作物園芸実験・実習や卒論は、それぞれ野菜コース研修の共通実験・実習、個別実験に相当する。本来、学生より大人であるはずの研修員ではあるが、モチベーションの大切なことなど、その学ぶ姿勢・気質は極めて学生によく似ている。また、技術習得において、頭でっかちになってしまう点もよく似ている。

鯉淵の4年間の教育では、野球に例えれば、初めは何のために必要なか解らないかもしれないが走り込ませること(農作業)で作られる足腰の強さ(作業センス:技能)を、フォーム(栽培技術)の指導同様に教えることができる。私は学生に、薬を例に『量は質を変える』、「栽培規模の違いが栽培技術を変える」ということを理解させてきた。また、「作業量をこなすことによって技能が身に付き、それによってその技術の真の意味が理解できる」と教えてきた。しかし、当コースの研修では圃場規模や時間は限られており、そのようなカリキュラムを実施することはできないし、また、彼らは農家ではないので、その必要性も大きくはなく、やや歯がゆいところはある。が、日本の学生も同じことは言えて、理想のフォームのみに興味が向くことがあるが、実はその実現のために足腰鍛錬がより必要になるかもしれないことを看過して議論する。



エンジン脱穀実習



遠成堆肥づくり実習

28年前にここTIATCから鯉淵学園に就職し、新入職員挨拶として「農業者は経験至上主義的に過ぎるのではないか。経験至上主義者は自分の縄張りを主張して、頑なに新参者の考えを受け入れない。理論は経験を母にして生まれたものである。また、経験は時に理論を父として育てられなければ、経験によって誤った結論を導く。」という生意気な自己紹介文を書かせてもらったことを思い出している。その後私は、教壇でも講義はして来たのだが、農場部に属して長く作物栽培を経験することになった。結果、年齢のせいもあるのか、農業は奥が深すぎて理論で片付けられない職業であると思うに至ってしまった。まったく生意気であったと思うが、必ずしもそれが悪かったとは思っていない。研修員も帰国後はここで学んだ理論をぜひ活かしてほしいと切に願う。(2017年1月 及川)